

シルラーが美學上の功績 (三)

深 田 康 算

シルラーが、上述の如く、不正確なる意味に於ける美の概念の道德への應用として、道德美を見てゐるのは、吾々に取つて極めて興味深きことである。

それは一方に於ては、シルラーが（……カントの動もすれば道德即美に傾き易き論述の傾向に對して正當にも……）道德と美とを直ちに一つと見做して道德美を語るものを以て、不正確なる意味に於ての美を語るものに外ならぬと見てゐることを吾々に示してゐるからである。道德はそのまゝ美ではありえぬ、道德にそのまゝ美を結び附けたものとして、道德美は、道德が理性に基くもの美が感性に關係するものである限り、正確なる意味に於ては不可能でなければならぬ。美は倫理的善なる純粹意志即ち理性の純粹形式——即ち道德から全く異なるもの、美と道德性とは殆んど相反するものでなければならぬと云ふシルラーの考へ方が、其所に明らかに示されてゐるからである。美を單なる形式と見、それ故に理性の純粹形式たる善を以てそ

の儘美と一つなるものであるとさへ考へるに傾き易かつた所のカントに對して、美は形式の形式でなければならぬと見定めたシルラーが見地の徹底の意味は實に此所に存する。美が現象に於ける自由であると云ふとは、美と道德とが背反すると云ふことであり、道德に就て美を語ることが必然的に不正確でなければならぬと云ふことに外ならない。道德美を以て不正確なる意味に於ける美であると云つたことに依りてシルラーは明らかに、美と善と、藝術と道德との區別を正當に確立したのであると云へる。——但し斯く兩者の區別を正當に明らかにしたことは實は同時に又正確なる意味に於て in eigentlichen Sinne の道德美を語り得る基礎を置いたことなのである。何故ならば美を形式の形式と見做すこと、美を現象に於ける自由と見做すことは、道德の形式化、自由の現象化を美と見做すことである。換言すれば理性と感性との交渉、自由と現象との交渉が美の世界を構成すると云ふことに外ならない。美の世界は道德(若しくは理性)と感性との交渉、自由と現象(若しくは自然)との交渉である。そこには理性と自由との獨裁がありえない。又尙更感性の自律——斯くの如きものゝ可能は唯不正確なる意味に於てのみ云はれるに止まるであらう——や現象の自由やが跋扈することも許されない。理性の純粹道德性と純粹意志の自由

とは何處までも尊重されなければならぬ。美の世界に於いての問題はたゞそれらが如何にして、そうして如何に、感性と現象とに關係し交渉し、そうして一致しうるかに在る。善と美との兩者が別々であるとシルラーの正當に云つてゐるのは、どうであるからして兩者のあいだに交渉がある、そうして美の世界は此兩者の交渉の領域に屬すると云つてゐるのに外ならない。従つて此交渉のあると云ふ側から見れば道德に就て美を、美に就て道德を吾々は正確なる意味に於て、語りうる。シルラーが美を以て形式の形式と云つた眞意は此所にある。そは美の正確なる定義であると共に、美と道德との關係を正確ならしめるものである。――

併しそれと同時に他方に於ては、道德美を不正確なる意味に於ての美だと考へることに依りてシルラーが美的道德と云ふ誤まりたる概念へ導かれるの危險に陥つたことも興味ある點である。道德美は理性と感性との相背反せる原理の上に假りに生じた所の野合なるが故に不正確なる意味に於ける美であるとせられる。そうして正確なる意味に於ける美とは單に感性のみの上に立つもののでなければならぬかの如くに考へられる。それ故に美を「感性の自律」「自然の自由である」とさへ説かれる。そうして見れば斯くの如くに考へられた所謂正確なる意味に於ける美を

道德に應用する時、道德美とは即ち美的道德に外ならぬものとなつてしまはなければならぬのは明らかである。何故ならば、自由の現象に於ける現はれが美なのではなくして、現象の自由が美であるとせられることに依り、道德の自然が美なのではなく、自然の道德が美なのであるとせられなければならぬからである。道德美を不正確なる意味に於ての美と考へることは、シルラーに取りては斯くしてやがて「現象に於ける自由」は不正確なる意味に於ての美である、「自由」に於ける現象が、換言すれば「感性の自律」が正確なる意味に於ける美であると云ふ考へ彼を導いて行くことゝなつたのである。正當に（シルラーの立場からしても亦正當に）打建てらるべきであつた所の道德美の概念が、道德美を不正確なる意味に於ての美と見做すことに依りて、誤まれる美的道德の概念を生むに到つた徑路は斯くして理解されうるであらう。（カントに反對してシルラーが説かうとした美的道德が誤解に基くものである點に就ては本誌五月號「道德的美」參照）——シルラーが道德美を以て不正確なる意味に於ける美と見做したとは、上述の如くに、一面に於ては善と美との間に嚴然たる區別が存することの正しき認識に基くものであると同時に、一面に於ては美的道德なる誤まれる概念へ彼を導く所以となつた。前者の正當なることゝ後者の誤謬な

ることゝを明らかならしめるものは、嚴密に正確なる意味に於て云はれうる所の美としての道徳美でなければならぬ。

蓋し、吾々の見る所に誤りがないとするならば、シルラーが道徳美を以て不正確なる意味に於ける美だと考へるのは、道徳と美とを以て(理性と感性との)相背反せる原理に基くものとし、其結合は野合に外ならぬと考へるからであり、そして感性にのみ基く所のものを以て正確なる意味に於ける美だと考へるからである。然るに斯くの如き考へ方から云はれる所の正確なる意味に於ける美なるものは、それは單なる「感性の自律」であり「美的道徳」である。決して「現象に於ける自由」ではなく「形式の形式」ではない、即ち決して美ではありえない。嚴密に云ふ所の正確なる意味に於ける美ではありえない。美とはシルラー自らの正しく定義した如くに「自由の感性に於ける現はれ」でなければならぬからである。そうして又、シルラーが道徳美を不正確なる意味に於ける美と云ひ、善と美とを截然區別しようとするとの正當さは、善が理性、美が感性に基くが故にと見る點に存するのではなくして、實は善が理性にさうして美は理性と感性との交渉に基くが故にと見る所に存する。(——シルラーが「悲壯に就て」über das Pathetische に於て、道徳評價の立場と美的評價の立場との相違を詳論

してゐるのは、此正當なる見地からして善と美とを區別したものに外ならない。換言すれば善は純粹意志形式であり、自由そのものであるのに、美は形式の形式であり、自由の類似であるが故である。美が「形式の形式」である故に、單なる形式である所の善から美は區別せられる。美が「現象に於ける自由」である故に、本體的なる自由である所の善から美は區別せられる。美が「現象に於ける自由」である故に、本體的なる自由である所の善から美は區別せられる。そうして兩者が斯く峻別されなければならぬがゆえに、兩者のそのままなる結合としての道德美は——恰も美的道德がやはりかゝる野合であり誤まれるものであるのと同様に——野合でありあやまれるものでなければならぬのである。其意味に於てそうして唯此意味に於てのみ——道德美は不正確なる意味に於ける美だと云はれうるに止まる。そうであるからして、嚴密に正確なる意味に於て云ふ所の美としての道德美に就て語りうるために吾々に取りて必要なることは、唯飽くまでも美を「現象に於ける自由」形式の形式と見定めたシルラーの眞知を見失はぬことより外にはないと云へる。シルラーをして彼自身の眞知を見失はしめた所のは、現象に於ける自由に對する云ひ代へとして用ゐられた「感性の自律なる彼自らの造語なのである。

「現象に於ける自由」がシルラーの正しく定義した如くに美である。それ故に美は單なる感性の自律ではありえない。それ故に又善を理性に基くもの美を感性に基くものとして兩者の間に單なる背反を考へるとはできない。寧ろ理性と感性との交渉に於てこそ美の世界が認めらるべきである。「現象に於ける自由」が美である以上、自由は何等かの形に於て現象に現はれうるのでなければならず、現象は又何等かの形に於て自由を持ちうるのでなければならぬ。そうでなければ「現象に於ける自由」はありえぬであらう、従つて美はありえぬであらう。美があると云ふ事實は自由が何等かの形に於て現象に現はれうるのでなければならぬこと、現象が何等かの形に於て自由を持ちうるのでなければならぬことを明示してゐる。

カントが理性と感性との間に單なる背反のみを見たとは、それ故に、誤りであると云はなければならぬ。シルラーが「美しき魂」の説は恰も此誤謬の洞察から發する。そうしてそれは——美的道德としては誤解に基くものであり、それ自ら已に亦誤謬に外ならないのに拘はらず——實に此點に於て其眞理を保有するのであると云へる。カントの嚴肅主義的道德論に對してシルラーの説いた所の「美しき魂」が其本旨に於ては決して美的道德を——換言すれば理性と感性との其儘なる一致を——提

唱するものでありえぬことは——「典雅と莊重に就て」に於て「美しき魂」が若しくは性格美 (Charakterschönheit) がイデーであることの注意せられてゐる點、及び「人間美育論」の一つの脚註に於て「義務の道德的超越はありえぬ唯その美的超越がありうる」ことの注意せられてゐる點、此二つの點は特記に價ひする。——吾々の已に述べた所から明らかであらう(前掲論文「道德的美参照」)。「美しき魂」は美の範疇に屬するもの、道德美の最高位に位するもの、それに達するが爲には理性と感性との間の烈しき闘が戰はれなければならぬもの、その情緒に於ける現はれは崇高でなければならぬ Die schöne Seele muss sich also im Affekt in eine erhabene verwandeln. ("über Anmut und Würde.") などシルラーに依りて説かれてゐる所のものである。「美しき魂」は、そうであるからして、一面に於ては理性と感性との融和として人間性の完成のイデーであり、その意味に於て道德的生活の理想、義務的道德の超越であると云へると共に、一面に於てはそれは何處までも道德的美であり、美の種類である。即ち美の範疇に屬する。それ故に「美しき魂」は道德學的概念ではなく、「美しき魂」の主張は一つの道德主義の主張ではなくして、——美的道德主義の主張とすればそれは無道德主義でなければならぬであらう、善と美との……イデーとして、はなき概念としての……一致を主張するもの

とすればそれは善と美との區別の滅却でなければならぬであらう)それは美學的觀念であり、その主張は一つの美學說の主張である。換言すれば美が理性と感性との交渉に在ること、美の最高の範疇が此兩者の融和即ち美 *das Schöne* に在るとの主張たるに外ならない。「美しき魂」は、一面に於ては人間性の完成として道德の極致と考へられうる、併しそれ故にそれは道德學的概念ではなくして美學的概念に屬する。シルラーが「美しき魂」をイデーであると云ふのは此故であり、義務の道德的超越はありえぬ、唯其美的超越がありうることを云ふのも此故である。カントの嚴肅主義的道德に對するシルラーの「美しき魂」に依りての反對が單に反對の「外觀」を持つだけに止まらなければならぬのは此所からして明らかであらう。カントが「美しき魂」を否定するのは善の概念と美の概念との純粹性を確保したいがためであり、彼れの嚴肅主義は道德の純粹性より他のものを意味するものではない。シルラーが「美しき魂」をイデーであると云ひ、そうして義務に就てその道德的超越はありえぬ唯美的超越のみがありうると云ふのは、即ち彼れも亦實に畢竟カントの確保しようとする所のものを確保しようとしたのに外ならぬのである。「美しき魂」がイデーであること、又これが美學的概念であること——換言すれば道德的美が美的道德ではなくして美の範

疇に屬すること——の注意は斯くして彼れの「美しき魂」の説に於てシルラーをして飽く迄もカント學徒たらしめてゐる。併し此注意は唯にシルラーをして飽く迄もカント學徒たらしめてゐるだけに止つてゐない。むしろ尙其上に重要な點に於て實に彼をしてカントを徹底せしめてゐると云へる。何故ならば「美しき魂」の主張は、上に述べた如く、カントに認められる所の理性と感性との單なる背反に對して、理性と感性との間に交渉がなければならぬことの洞察に基いて、美が即ち理性と感性との交渉に存すること、美の最高の範疇が此兩者の融和(即ち美)でなければならぬとの主張である。そうして理性と感性との單なる背反のみを力説しようとするカントが——少なくとも其の論述の上に於て——屢々陥つてゐるところの曖昧と不徹底とは、此主張の下にシルラーに依りて徹底せられ明瞭にせられてゐるからである。

上に述べた如く、シルラーの「美しき魂」は美學的概念として、嚴密に正確なる意味に於ての美としての道徳美に就て語ることを可能ならしめてゐる。「美しき魂」は「理性」と感性との融和としての人間性の完成のイデーであると同時に「現象に於ける自由」の最も純正なる形として美に取りてもイデーである。美は「現象に於ける自由」、「理性と感性との融和」として其極致を「美しき魂」に見出さなければならぬ。「美しき魂」

が理性と感性との融和であると云ふのは、そうであるからして、善と美との概念の野合を意味するものではなく、道德の純粹性を傷けるものでもない。それはシルラーの所謂現象に於ける自由が感性の自律でありえぬのと同じく又カントの所謂道德的善の象徴が善を以て直ちに美の形式とするのでありえぬのと同じである。「現象の自由」を以て直ちに感性の自律とすることの誤りが、美を以て理性と感性との融和とすることに依りて指摘されるやうに、善を以て直ちに美の形式とすることの誤りも亦美を以て理性と感性との融和とすることに依りて矯正せられるであらう。美を以て「理性と感性との融和」とするのは、理性が感性に打克つことを意味するのでもなく、又感性が理性に打克つことを意味するのでもない。前者の場合は單なる道德である、後者の場合は單なる自然である。理性と感性との融和、即ち人間性の完成若しくは性格美は道德的美として單なる道德でもなく、單なる自然でもありえないのは其故である。「美しき魂」即ち道德的美の概念は畢竟美が理性と感性との融和であること、美の最高概念が——例へば崇高ではなくして——美でなければならぬことを指示するに過ぎない。此概念が美を「現象に於ける自由」とする定義から正當に引き出されることも亦明らかである。「現象に於ける自由」は單なる自由ではない、自由は

現象には現はれえないからである。又自由に依りての現象の克服ではありえない、現象に於ける自由は其際失はれるからである。併し又現象それ自らの自由でもありえない、現象それ自らには自由がなく、自由とは實踐理性の概念に外ならないからである。「現象に於ける自由」とは自由の類似 Analogon が現象に於て認められることに外ならない。「現象に於ける自由」が本當の意味に於ける自由に對する關係は恰も「理性と感性との融和」が純粹實踐理性に對する關係に等しいと云へる。「現象に於ける自由」が自由の類似として決して自由そのものではないやうに、「理性と感性との融和」は又理性の單なる類似として決して理性そのものではない。「美しき魂」が人間性の完成のイデーとして、しかも單なる美でなければならぬのは其故である。併し「美しき魂」が斯く純粹に美學的概念として見定められることに依りてのみ、嚴密に正確なる意味に於ける道德美の概念は確立せられる。善と美との種々なる形に於ける野合は斯くして始めて摘發されうるのである。カントの美學說に認められる論述上の不徹底がシルラーに依りて徹底せられてゐると云へるのも實に此點に懸かつてゐる。

カントは人の知る如く、「美しき魂」を否定してゐる。道德的主義としての其れを否

定してゐる。理性と感性との單なる背反のみを力説するとも見らるゝカントの第二批判第一部第一書第三章に於ける論述——それに對してシルラーは反對しなればならぬと考へたのである——が、道德的動機からあらゆる傾向性(即ち感性)の關與を排除するのは、併し、道德性の純粹を確保するものとしてシルラーも亦遂に認めなければならぬ所である。そうしてカントが彼の個處に於て快不快の感情に對する純粹實踐理性の認識の關係を先天的の概念から規定しうる恐らく唯一の實例として畏敬 *Achtung* を道德的感情と見做してゐることは、理性と感性との間に單なる背反のみあるのではなくして兩者の間に交渉のあることを明言したのに外ならない。(——カントが斯く見てゐたことの尙一層明瞭なる證據は第三批判に於て、殊に其序論二に於て、見出される。——)加之吾々は第三批判第二十九節の次ぎの一般的附註からしてカントが絶對的善は美的批判力の領域に屬しないけれども、此理念に依りての主觀の被規定性即ち道德的感情は美的判斷力及び其形式的制約と類似する故に、此道德的感情は、己れの純粹性を失ふことなしに、義務からの行爲の合法性を或は崇高として或は又美として表象せしめるのに役立つると云つてゐることを知る。 *Das Schlechthin-Gute... (das Objekt des moralischen Gefühls)... gehört an sich zwar nicht für die*

aesthetische Urteilskraft... Aber die Bestimmbarkeit des Subjekts durch diese Idee... d. i. das moralische Gefühl ist doch mit der aesthetischen Urteilskraft und deren formalen Bedingungen sofern verwardt, dass es dazu dienen kann, die Gesetzmässigkeit der Handlung aus Pflicht zugleich als aesthetisch, d. i. als erhaben oder aber auch als schön vorstellig zu machen, ohne an seiner Reinigkeit einzubüssen. (Kr. d. U., Allgemeine Anmerkung zur Exposition der aesthetischen reflektierenden Urtheile) 之に依つて見ればシルラーが「美しき魂」に於て要求した所のものは、實に已に其正當なる意味に於てカントから與へられてゐるのである。カントは實に是等の個所に於て理性と感性との交渉がなければならぬこと、そうして其交渉が美の世界であることを確言してゐる。殊に上に引いた一句「或は崇高として或は美として」は特に注意に價するものと云はなければならぬ。何故ならば人の知る如く、カントは道徳の純粹性を確保するがために屢々「理性と感性との背反のみを力説するに傾いた結果、動もすれば理性と感性との美に於ける融和をさへも觀過して、理性の威嚴のために唯崇高のみを高調したからである。

カントは崇高を以て或は美に對立するものとし、或は美には屬せざる單なる其附録に過ぎぬものとし、或は又美の最も主要なる部分として、色々に異なりたる立場か

らして之れを取扱つてゐる。美に於ては單に悟性が想像力と協力するのに反して崇高に於ては理性と想像力との協力が認められるとも云はれてゐる。是等の美及び崇高に關するカントの論述に於て見出される所の曖昧と不徹底とは、美が理性と感性との融和として其最高範疇を美に置かなければならぬことの注意に依りて徹底せしめられなければならぬ。崇高が理性理念に關係あるの故に美的範疇には屬せずして恰も道德的概念であるかの如く取扱はれてゐること、及びそれ故に又美が直ちに道德的善に依りて規定せられるものであるかの如く取扱はれてゐること、之等の曖昧も亦美が理性と感性との融和である故に、理性がそのまゝ美の原理ではありえぬこの注意に依りて明確にされなければならぬ。それを恰もシルラーは成し遂げてゐると云へる。カントが崇高を高調して之れに單なる形式としての美に對して優位を興へようとし、崇高を以て美の範疇に屬せざるものと考へようとし、又美を以て道德的善の象徴と見ようとする論述の中に、屢々理性の爲に感性を押へ、善のために美の純粹性を傷くるに近かきものゝ含まれてゐるとは丁度シルラーが美を高調してそれが理性に依りて規定せられえぬ故を以て動もすれば感性の自律を説き美のために善の純粹性を傷くるに至るの興趣を同じくしてゐる。此兩者の陥り

易き誤りは上に引ける如くカントの確かに一度は言明した所の、そうしてシルラーに依りて其本意の攫取せられた所の理性と感性との融和としての美の定義に於て始めて正さるべきである。カントが崇高を高調してゐるのは、美を善の象徴と云つてゐるのと同じく、善をして美の位を纂奪せしむるもの、善と美との野合を主張するに甚だ近かきものがある。それを矯正しうる所のものは崇高を其中に含む所のシルラーの美の力説でなければならなかつたのである。

シルラーは斯くしてカントの根本的精神と基礎的概念とを攫取することに依り、美を「現象に於ける自由」であると云ひ「形式の形式」であると云ふ彼れの定義に依りて、カントを徹底せしめた。カントの論述に於て見出される所の不徹底の中最も著しきものは、附庸美を純粹美から除外しつゝしかも美を以て道德的善の象徴と見做すこと、及び崇高を以て美に屬するが如くしかも又美的範疇には屬せざるが如くに見做すこと此二つの點であるとも云へよう。そうして此兩者の發して來たる源は、美を以て理性と感性との融和と做す見地が——カントの *implicit* に云つてゐるのでなく實に *explicit* に云つてゐる所に依りて彼れの見地であるのに拘はらず——屢々動

搖して動もすれば見失はれる所に存するのである。シルラーの説いた「美しき魂」の説は——彼自らも亦陥ることを免れなかつた所の其色々の誤謬にも拘はらず——恰も此源泉に於ける濁りを清めて澄み通るものとなしたと云へる。カントの美學に於ける基礎概念が純粹なる形式としての美に於て與へられてゐると云へるならば此純粹なる形式を其最も純粹なる形式に於て理解しそうして之れを最も純粹ならしめたものはシルラーであるとも云へよう。(完)